ショートストーリー　第３話　農業編

真夏の太陽が傾きはじめ、田んぼ一面の緑が揺れる。

風が出てきたから、少しは涼しくなるだろう……そう思って軽トラックを停めたが、降りた瞬間にまとわりつく湿気に、思わず眉をひそめた。

台風が近づいていると天気アプリが言っていたが、まだ明日の話だ。空は薄曇りながらも光を保ち、作業には十分だ。

荷台から草刈り機を降ろしていると、助手席の窓から白い犬が顔を出した。ハッハッと舌を出しながら、どこか期待に満ちた目をしている。

一緒に田んぼに来るのはいつものこと。助手席のドアを開けると自分で飛び降りてちょうど車体の影の中に座る。

荷台から出した銀色の深皿に水筒から水を注いで近くに置いてやると、少し舐めた後、大きく伸び始めた車体の影に寝そべった。

「今日は風があるから、日射しさえなければ結構涼しいよな」

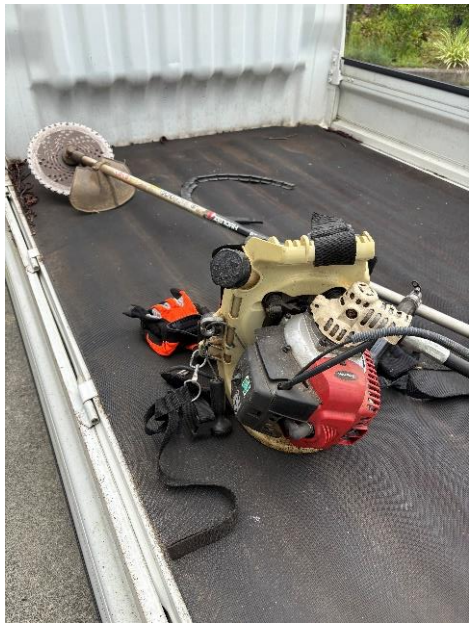
自分で快適な場所を見つけた飼い犬に満足して、軽く頭を撫でたあと、手袋をはめ、草刈り機を背中に背負った。

つばの広い麦わら帽子をかぶって　安全メガネをかける。

背中の草刈り機は燃料を満タンにすればかなりの時間稼働するが、今日は昨日の残りで大して入っていないはず。

「暑いし1時間も刈れば十分か」

つぶやきながら腰のあたりのスロットルを勢い良く引いてエンジンをかけた。



右から左へ、右から左へ。

草が倒れ払うたびに、回転する刃の音が畦畔にリズムを刻む。汗が首筋を伝い、シャツの背中にじっとりと広がっていく。

今の東北は、昔のような涼しさはもうない。

高温に合わせた品種を栽培しているが、もっと暑くなったらどうなるかわからない。

気温の上昇に伴い害虫の発生時期は早まり、分布域も広がった。昔はカメムシを防ぐために地域でそろえて年3回程度やっていた草刈も、高温化で二期作が東北で始まってから回数が増えた。

しばらく夢中になって草を刈り進めていると、ポケットのスマホが震えた。画面にはニュースアプリの通知が浮かぶ。

「台風27号接近中。十分な備えを……」

風が少し強くなった気がした。空の端には黒い雲がじわりと広がっている。

スマホが再び震えた。妻からの電話だ。

「もしもし？　そっち、どう？　暑くない？」

「暑い。風はあるけど思ったより涼しくないよ」

「やっぱり……。あのね、牛たち、餌の食いがまた悪くて。手伝ってほしいのと、またひどい雨が降った時のために牛舎の周り、土のう積むか相談したくて」

「風も強いって言ってたな。わかった、すぐ帰る」

つい先日の台風では、牛舎が浸水ギリギリで助かったばかりだ。今度は風も強いらしい。心配の種は増えるばかりだが、やれることからやるしかない。

草刈り機を止め、軽トラの荷台に積み込む。刃に絡んだ草をとって投げ捨てていると犬がいつの間にか荷台に上り、道路のほうに顔を出してしっぽをブンブン振っている。

すぐに女子高生が自転車をこぎながら通り過ぎていく。

「あ、かわいい……！」

驚いたように目を丸くし、しかしすぐ笑顔になって走り去っていく。

犬は得意げにさらに強く尻尾を振った。

「ほれ、行くぞ」

犬を抱き上げて助手席に放り込むと、じゃれつくように前足を伸ばしてくる。遊んでほしいのだろう。だが今日は無理だ。軽く頭を撫でていなしながら、運転席のドアを開ける。

その瞬間、背中を押すように強い風が吹いた。湿った重い風に急かされるように運転席に乗り込んだ。

気づくと空はさらに暗くなり、黒い雲が田んぼの向こうまで広がり始めていた。台風の気配が、確実に近づいている。

「帰るぞ」

草刈り機の振動を抑え込んでいたせいで少し震えている手から手袋を外し、血の巡りを取り戻すように握ったり閉じたりしてから軽トラックのエンジンをかけた。

助手席の犬は少し顔をあげてこちらを見たがすぐに重ねた前足に頭をのせていつもの体制になる。

家までの道を走りながら、胸の奥に重い影が広がる。

暑さに大雨、風も吹く。米も、牛も、畑の野菜もそりゃ具合悪くなるよな。気候変動なんて昔騒いでいたようだけれど、もう真っ只中で逃げようがないよ。

それでも——

やれることからやるしかない。

軽トラは、湿った風を切り裂きながら家へ向かって走り続けた。

農業編　おわり